

目次〔上〕

序——改題・改版に際して

旧版——序（正篇）

旧版——序（続篇）

第一篇——祭りと祭式 1

形の祭りと精神の祭り 小野祖教 2

一、神事奉仕者の心得 2

二、精神の体現 9

三、作法拾遺 18

開扉と祇候 斎戒と潔斎 神社祭式と祭りの日数 御内陣の奉仕

四、式年遷宮と祭りの端役 36

祭祀の様相面の分析 小野祖教 39

一、定義や分析の必要 39

二、分類の試み 43

伝統及び成立より見たる分類 祭祀の神学的分類 祭祀の様相の分類 祭祀の官

制及び本庁祭祀制の構成図

祭式作法雑考 金光槌爾（談） 53

踴躍の作法と出典 開閉扉の問題 祝詞奏上と拍手

第二篇——祭祀の真髓

57

宮中では神事を先とする 甘露寺受長(談)

58

神事奉仕五十余年 変らぬ御敬神 祭祀と御教育 見えざる祭り さっぱりとした祭り わが家の祭り

宮中祭祀の体験 八東清貫(談)

64

今上陛下の御敬神 宮中祭祀のお清めと奉仕 掌典の潔斎 毎朝御代拝のこと
新嘗祭の厳儀 書かれざる手ぶり(亀卜の秘法) 秘して語らず 勅使に立って
非常の際の心構え 神のお目覚め

社務即祭祀 長谷外余男(談)

78

はしがき 生まれながらの神職 社務即祭祀 引き継ぎの作法 祭祀は型ではない 気になる閉扉の行事

建築家の見た祭り 角南 隆

87

神離祭祀と磐境祭祀 神社の画一制 生島足島の御修築 人霊を祭る神社 神社
建築のモダン化 建築と祭式作法

祭式五十年 古川左京(談)

93

五十年前の神職 謹厳だった桑原宮司 変った祓い方 いさぎよい退き際 先輩
の率先窮行 祭式上の問題 宮司の就任 広いマナコが欲しい 伊勢の四つの火

第三篇——御遷座拾遺

103

御造宮から御遷座まで 加藤鏡次郎(談)

104

神屋と齋戒 裸になって御復興 三べん拜んだ五百円 感激をよぶ神の御徳

非常遷座と内陣秘録 小野祖教(対談)

113

忘れられた角度 独断を避けよ 内陣御内見の意味 内陣秘録と改造 側近者の
責任 御内陣参入作法

御内陣御模様替と遷座 高松忠清(談)

121

往昔の姿に復す 真剣さと立派さ 内陣お掃除の徹底 潔斎には作法がある
播かぬ種は生えぬ 渡辺源一郎

128

先代の遺徳 氏子の中に融け込む やはり神事が先
焼跡の御遷座 木村重由(談)

130

神道村の氏子 神葬と遷霊 焼あとの御遷座
裸で御遷座 田中喜芳(談)

134

雨乞い禁物の社 神屋とヒマ屋 裸で御遷座 御樋代御奉製の失敗 御神体に白
粉口紅 開闢以来の結婚式 かけ出しの頃 官僚主義と生きた祭り 真面目の標
本

珍しい御遷座巡り 飯田秀真(談)

144

御羽車の話 神座の遷らない御遷座 御遷座奉仕の心得 祭儀は一日で終るべき
ものか 雨の日の参拝 貞明皇后 一戸宮司の想い出 参列官の遅刻
雨儀の用意 富岡盛彦

157

久能の祭式と穂高の遷座 白井光男(談)

159

久能山と一実神道 穂高神社の特色 穂高の祭典 穂高の循環移動式遷座法 穂
高の遷座の祭儀

第四篇——神事

183

御遷座祭の実際 木庭菅根(談) 169
 二回の御遷座 天の時を得て 日程の概要 計画と打合せ 細目は限りない 祭儀の心得 寄附と直会
 御遷座の心得 井上信彦(談) 174
 私の遷座祭奉仕 鈴木左内 179

稻荷大社のお煤払い 中村義次(談)

184

神座の位次 私祭の献饌 神璽の奉遷と神輿 お煤払いの行事と作法

梅のズエの遷霊 寺井種長(談)

189

梅の枝で遷霊 年々変る御旅所 地主神を先に祭る 口のきけない祭り 大將軍

社の祭り 銚流神事 遷座式作法

蒲焼を聞き召す神 須佐建啓(談)

195

変った御渡御 鰻と玄米の神饌 いろいろな神事

登拝祭と弥生祭 喜田川清香(談)

200

仏教色を去る 二荒山登拝祭 弥生祭と鹿の皮 珍しい御神幸・御遷霊 質疑

惣拝と夜の祭儀 野上正篤(談)

207

弥彦神社の惣拝 祭りの混雑とスピード時代 宵旣の御饌の奉仕

西宮の神事と奉仕 吉井良尚(他談)

212

新米にはこたえる 真剣な崇敬心 奉仕と勉強

粥占神事について 神麻新六

219

八幡本宗(宇佐神宮)の祭祀 到津保夫 224

真剣素朴な祭り 八剣昭雄(談) 226

二つの天王台 氏子中心の粥占神事

御神体は御墓所 西高辻信貞(談) 233

太宰府天満宮の御構造 四日にわたる大きい祭り 更衣祭の作法その他

一カ月の祭儀 高原美忠(他談) 240

祇園祭 祭りの核分裂 氏子の中に生きる祭り 特色を失う 祇園造と祭儀 本殿に宿直する

多賀の神事をめぐりて 三浦重義(他談) 259

多賀の先食 馬頭人と潔斎 頭差しの神事 非礼の礼 口をきかない話

軍越神事 松本浩通 266

厳島御鳥喰神事 林 喜親(他) 268

御鳥喰・一名鳥巡り ヤッ、そこへ 交互に御鳥喰い 初心忘るべからず

六日間の大祭(藤崎八幡の神事) 岩下忠孝(談) 278

第五篇——神事の(さ)ま(ま)ま

287

本殿のない神さま 金鑽俊雄(談) 288

津島祭と運営の実態 伊藤晃雄 293

津島祭 津島祭と祭礼車屋 旧幕時代の船祭 津島祭運営の実態 神葎刈と青年

団奉仕の実情 神輿渡御祭と供奉人足 船祭奉仕の実態 むすび

一日に祝詞五回の祭り 内海喜久司(他談) 303

当殿と御前女 五回祝詞を奏上 神職氏子が一堂に参籠
 熱田神宮の特殊神事 長谷晴男(他談) 308
 祭りのさまさまを語る 淨見晴夫(他談) 313
 金刀比羅の祝舎神事 還らない御神輿 神饌のやかましい弥彦さん 荒っぽい潔
 斎 祭りとPR 聖地から観光地へ 平凡な普通祭式が果たす役割 鹿児島
 通夜祭 宮司が一生に一度拝む御神体 おこもり四方やま風景
 お潮祭と国司祭 山崎正之助(他談) 326
 お潮祭と万祝 国司祭の壮観
 嫁祝い大根戦祭 行木美能里(談) 330
 大行事・側高の神 額賀大成(談) 334
 九十余度の祭り 軍神祭 大饗祭 御扉開閉神事 大行事・側高神
 はつかえさい 二十日会祭の新しい発展 菅 貞好(他談) 350
 起源は修二会か 行事の内容 産業と結びついて発展 奇祭の名残
 尾張大國霊の古例 吉田玄蕃(談) 355
 宵宮が賑わう 御鎮座神事 催追祭
 土器を二度用いない 三島安久(他談) 365
 伝統と新しい祭りの誕生 原 勝治(他談) 372
 祭りの拡大、美事な運営 練りものも一新した 田祭 官祭以前の祭り
 住吉大社に残るもの 津守通秀(他談) 381
 当てはまらない標準祭式作法 古い作法の名残 変った祓の形 昔の神事と祝詞
 のあり方 昔あった煤掃作法

住吉の埴使 梅原忠治郎 392

第六篇 体験から 397

降神の儀註 宝来正信 398
 祭儀と視野 畑 宗一 401
 玉串奉奠考 近藤通泰 405
 修養の積み重ね 酒井利行(談) 406
 日々の修養 私の祝詞奏上 小さい作法 カッコウのいい結婚式 神庭会議
 之を誠にす 八剣 昭 412
 菊水祭の変化 西田重一 413
 祭儀の前提 古谷金祐 415
 礼の繁簡 津守通秀 416
 おじぎ 六色の禁法 先導と羽織
 小兼務社の祭式作法 吉田 陸(談) 418
 狭い神社と作法 立礼の作法を研究せよ 助勤と習礼 正服のない神職 兼務社
 の祭典準備
 答める前に 米田政吉 423
 手水の作法について 祝詞作文と外国語 祭り・直会の語について
 変るもの、変らぬもの 高井稜威雄 425
 祭りは生きている 水野左近 426
 田舎の神主に必要 祝詞奏上の順序 神札のつくり方 夢のお告げ 祭りは生き

ている 葬式路 祭りは一回 虫送 赤いものを食べない 神職の住居
信仰の山に仕えて 前田勝也 430
祈禱並びに神拜行事について 祈禱 神拜行事
初宮詣の神勤 田代剛人 433
祓と鎮魂 森田道三 435
安きをぬすむな 斎藤直芳 437
儉安自滅 表芸さえ怠る 本を正さざれば
時代と祭庭 高山 貴 440
お籠所とユースホテル 鈴木市右 443

装幀●黒津きよ子+OUT 写真●梅津好宏 撮影協力●明治神宮

第一篇 祭り と 祭式